

# 女子総合大学としてさらなる飛躍を

同志社女子大学 学長  
加賀 裕郎



かが・ひろお氏

1955年生まれ  
1984年 同志社大学大学院 文学研究科 哲学及哲学史専攻  
博士課程 単位取得満期退学  
1986年 同志社女子大学着任  
1997年 同学教授  
教務部長、入学センター所長などを歴任  
2008年 現代社会学部長 兼任 国際社会システム研究科長  
2010年4月より現職  
「デューイ自然主義の生成と構造」(晃洋書房, 2009年)、「現代哲学の真理論—ポスト形而上学時代の真理問題(編著)」(世界思想社, 2009年)など著書多数

日本の将来を憂えた新島襄は、幕末に国禁を犯して渡米し、キリスト教の洗礼を受け、大学などに学びました。その後、明治新政府の岩倉使節団に通訳として同行し、欧米の学校を視察した経験から教育の重要性を認識し、帰国して1875年(明治8年)に同志社英学校(現同志社大学)を設立。翌年、女子塾(現同志社女子大学)を設立しました。創立者の新島襄は、130年以上も前から女子教育の重要性に気づいていたといえます。

本学はキリスト教主義、国際主義、リベラル・アーツを教育理念に据え、日々実践しています。

毎日のチャペル・アワー(礼拝)は、キリスト教精神の息吹に触れる機会です。学生が中心となり年2回企画するリトリート(修養会)や群馬県の福祉施設でのワークキャンプなどを通じて、学生には自らのためだけでなく、他者のために学び生きることの大切さを感じ取ってもらいたいと思っています。

キリスト教の教える「世界の人々は互いに兄弟姉妹であり、愛に国境はない」をモットーに、人類の共生を願い、国際社会で活躍できる女性の育成を目指すのが本学の国際主義です。多彩な国際交流プログラムを設けており、海外協定大学は北アメリカ・ヨーロッパ・アジア・オセアニアの8カ国38大学1コンソーシアムにおよびます。また、学芸学部国際教養学科は1年間の全員留学をカリキュラムに組み込んでおり、日本語・英語両言語で論理的に説明できるコミュニケーション能力の育成を目指す本学科の取り組みは文部科学省の教育GPに選定されております。

本学は、幅広く多様な知を吸収することが豊かな人間性を育むというリベラル・アーツの理念を有しています。所属する学部・学科でそれぞれ専門科目を学ぶほか、他学部・学科の科目を履修し、異なる分野の知に接することを奨励する良き伝統があります。

## 短期大学部と2学部5学科から、5学部10学科へ

本学は長年、英文学、音楽、食物学という3分野を柱として教育活動を行ってきました。女子大学として伝統的な分野ですが、広く現代女性を取り込んでいくには十分ではないと考え、2000年以降、総合的な学びの場の創造を念頭に改革を進めてまいりました。

2000年に設置した現代社会学部は、開学以来抱いていた「社会学分野の学部をつくりたい」という本学の希望がようやく実現したものです。

2005年の薬学部設置は少なからず世間を驚かせたようですが、これは新島襄の構想を具現化したものです。明治時代に京都看病婦学校と同志社病院を創設しましたが、財政上の理由から途中で断念。そんな医療への強い志をリバイバルさせたものといえます。

そのほか情報メディア学科の設置や短期大学部の廃止、大学院の拡大など、本学の理念と時代のニーズに沿った変革を行い、99年の短期大学部と2学部5学科から、現在の5学部10学科へと大幅に変革しました。ただし、入学定員はほとんど増やしていません。定員を増やすと募集が難しくなること、そして何より、規模が変わると教育体制も変えなければなりません。現在の学生数は6千人強。女子大学としては大規模ですが、大学としては中規模です。教育の質、研究の質を向上させるには、ひとまずこの規模を維持していくことが必要だと私は考えています。現時点ではこれ以上の学部・学科構成の変更計画はありませんが、時代の変化を見落とさず、臨機応変に対応したいと思っています。

## 「2つの女子大学」にならないために

本学の課題として、私は2点を自覚しています。

ひとつはキャンパスが2か所に分かれている点です。学芸学部・現代社会学部・薬学部のある「京田辺キャンパス」は、国家プロジェクトとして整備された

「関西文化学術研究都市」の中にある、最新設備を備えた郊外型キャンパス。一方、表象文化学部・生活科学部のある「今出川キャンパス」は、古都京都の中心に位置する、歴史薫るキャンパス。距離もあり、各々の個性が際立っているため、悪くすれば「2つの女子大学」になりかねません。そうならないように新入生の交流会やサークル、スポーツフェスティバルといった人的交流を進め、また学問交流も一層活性化させたいと考えています。

もう1点は、本学の「アイデンティティ」に関わることです。学生の学ぶ場は無限に開かれているべきと考え、そうした環境を存分に提供できていると自負しています。国際交流プログラムはもとより、国内においてもフェリス女学院大学、日本女子大学、金城学院大学と協定を結んだ「国内留学制度」、同志社大学との単位互換制度、京都を中心とした大学・短大48校の授業が自由に受講・単位認定される「大学コンソーシアム京都」、各種企業・行政機関等のインターンシップなど枚挙にいとまがありません。それらは非常に有意義だと考えていますが、そうした活動をするなかで様々な大学の在り方にふれ、「同志社女子大学とは何か? 何が強みなのか?」という素朴な問いが浮かぶようになりました。本学のアイデンティティをどう定めていくのか、それを真剣に検討する必要性が高まっていると感じています。

個人的には、「理系」をもっとアピールしてもよいのではないかと考えています。薬学部など当初は本学に馴染むかどうか心配しましたが何の問題もなく、むしろ国家試験の好成績などで社会的に大変高い評価をいただき、本学の価値を押し上げてくれています。

「お嬢様学校」といった従来のイメージに満足することなく、本学の存在価値を見極め、それを高め、成果を社会に知らしめていく。そうした努力が今後より一層必要であることは間違いありません。 ■